

# 東南アジア史学会会報

1990年5月

第52号

## 目 次

新会長挨拶.....	明石 陽至 (1)
会長選出経過報告.....	奥平 龍二 (2)
1989年度秋季会員総会・第12期第6回委員会摘録.....	(2)

### 第42回研究大会報告

プログラム.....	(3)
<b>個人研究発表要旨</b>	
幻のガルー王国.....	富尾 武弘 (5)
18世紀後期フィリピンの社会経済変革.....	菅谷 成子 (5)
フィリピンにおけるブローカー依存型国民統合体制の成立.....	川島 緑 (6)
印刷されたスンダの叙事詩ワワチャン.....	森山 幹弘 (7)
千年王国運動における伝統の復権.....	弘末 雅士 (8)
インドネシア、スルタン区世の死のディスコース (その1) .....	中島 成久 (8)
<b>共通論題—「東南アジアにおける共通語の成立と展開」</b>	
タ イ.....	村嶋 英治 (9)
公用語成立の過程—ビルマの場合—.....	大野 徹 (10)
シンガポールの言語統合.....	田中 恭子 (10)
インドネシア語の場合.....	佐々木重次 (11)

### 資料・研究短報

華僑・華人研究への一回想.....	市川 信愛 (12)
東南アジア研究とパソコン.....	赤木 攻 (14)

### 第41回研究大会発表要旨補遺

パプアニューギニア中央高地における	
ビッグマン権力の盛衰と贈与交易圏の変移.....	紙村 徹 (16)

地区例会・研究会活動状況.....	(16)
新入会員・住所変更等.....	(18)

# 東南アジア史学会会報

1990年5月

第52号

## 目 次

新会長挨拶.....	明石 陽至 (1)
会長選出経過報告.....	奥平 龍二 (2)
1989年度秋季会員総会・第12期第6回委員会摘録.....	(2)

### 第42回研究大会報告

プログラム.....	(3)
<b>個人研究発表要旨</b>	
幻のガルー王国.....	富尾 武弘 (5)
18世紀後期フィリピンの社会経済変革.....	菅谷 成子 (5)
フィリピンにおけるブローカー依存型国民統合体制の成立.....	川島 緑 (6)
印刷されたスンダの叙事詩ワワチャン.....	森山 幹弘 (7)
千年王国運動における伝統の復権.....	弘末 雅士 (8)
インドネシア、スルタン区世の死のディスコース (その1) .....	中島 成久 (8)
<b>共通論題—「東南アジアにおける共通語の成立と展開」</b>	
タ イ.....	村嶋 英治 (9)
公用語成立の過程—ビルマの場合—.....	大野 徹 (10)
シンガポールの言語統合.....	田中 恭子 (10)
インドネシア語の場合.....	佐々木重次 (11)

### 資料・研究短報

華僑・華人研究への一回想.....	市川 信愛 (12)
東南アジア研究とパソコン.....	赤木 攻 (14)

### 第41回研究大会発表要旨補遺

パプアニューギニア中央高地における ビッグマン権力の盛衰と贈与交易圏の変移.....	紙村 徹 (16)
---	-----------

地区例会・研究会活動状況.....	(16)
新入会員・住所変更等.....	(18)

---

## 新会長挨拶

---

### 御 挨 拶

明石陽至

昨年秋季大会において会員皆様の推挙を賜り生田滋会長のあとをうけて会長に選出され、その責任の重大さを痛感しております。微力ながら学会の発展に全力を尽くす覚悟であります。会員の皆様にはこれまで以上の御指導・御支援を賜りますよう、この場を借りてお願い申し上げます。

さて本学会も24周年を迎えます。この間、歴代の会長をはじめ会員各位の努力によって、大きな成長を遂げてきたことは周知の事実です。学会の会員数は320名を越え、機関誌は創刊以来19号に達し、会員相互のコミュニケーションを図って創刊された会報も、現在52号を数えました。また春・秋の研究大会は勿論、関東、中部、関西、中国・四国、九州の各地区では研究部会がもうけられ、活発な研究活動が行われております。

このように本学会は着実に発展を遂げてきましたが、より良い学会を目指して、さらなる努力が必要であります。その為に研究大会の内容、機関誌、会報の充実を図らなければなりません。その前提条件として、より多くの会員の獲得によって健全な財政を築きあげる必要があります。本学会の会員数は、わが国の東南アジア研究者総数と比較して、相対的に少ないので、会員各位におかれましては東南アジア関連研究者の会員加入運動を積極的に行って頂きますようお願い致します。

わが国の東南アジア研究は先達の諸先生の努力によって優れた伝統が築かれてきました。近年には若い研究者たちの優秀な研究によって、その研究の資質は世界の水準に劣らないものがあります。今後私達はたゆまざる研鑽をすることによって、東南アジア史研究の発展と学問的寄与に一層の努力を重ねるべきであります。

来年は本学会創立25周年にあたります。記念事業につきましては、会員の皆様と御相談のうえ、それに相応しい行事を企画致したいと考えております。

なお新役員は前期将来計画検討委員会の報告を受け、これまでの委員の数と分担について見直しを行い、次の方々に委嘱いたしましたので併せて御報告申し上げます。

第13期委員（敬称略、任期は1991年12月31日迄）

（庶務）伊東利勝　（会計）深見純生　（編集）池端雪浦、桃木至朗、根本 敬  
（編集顧問）山本達郎　（大会）土屋健治、桜井由躬雄、末廣 昭　（涉外・学術情報）  
石井米雄　（東北・北海道地区）欠員　（関東地区）鈴木恒之　（中部地区）楢木瑞生  
（関西地区）倉沢愛子　（中国・四国地区）植村泰夫　（九州地区）橋本 卓

以上の他に、委員会の構成メンバーには含まれませんが、（会計監査）を吉川利治氏に、  
（会計補助）を大橋厚子、（編集補助）を新井澄美、北川香子の各氏にお願いすること  
になりました。

また事務局は下記に置きます。

〒441 愛知県豊橋市町畠町1の1 愛知大学文学部伊東研究室内

Tel 0532-47-4111 (代表) Fax 0532-47-4132

新委員とはすでに2回にわたり、今後の色々な方針を協議いたしました。次期の全体委員会において審議・承認されしだいこれらの方針を総会に諮る所存ですので、会員の皆様の御協力をお願い致します。

---

### 会長選出経過報告

---

第12期選挙管理委員長 奥平龍二

東南アジア史学会第13期会長選出経過につき選挙管理委員会より次のとおり御報告申し上げる。

本会長選出のために設置された選挙管理委員会（奥平龍二、斎藤照子、鈴木恒之、根本敬及び西尾寛治の5名で構成）は、第12期会長生田滋氏の任期満了に伴なう新しい会長選出のための会長候補者選考委員7名の直接選挙を実施した。昨年10月30日付で選挙人名簿（被選挙有資格者）249名分（249通）の投票用紙（4名連記）を発送し、同11月14日回答を締切った。

選挙管理委員会は11月16日上記投票用紙回答分の開票を行った。回答総数118通、投票総数472票（白紙1、3名連記1、1名のみ記載1）で有効な投票総数464票であった。但し、回答締切日を大幅に過ぎて到着した4通は無効とした。右開票の結果、生田滋、池端雪浦、石井米雄、石沢良昭、桜井由躬雄、土屋健治及び山本達郎（以上50音図順）の7名の各氏が会長候補者選考委員に選出された。そのうち、桜井、土屋両氏が海外出張のため、「東南アジア史学会役員選出規則」第3条2項に則り、次点者3名の中から抽選により、吉川利治及び鈴木恒之の両氏が繰上げ当選となった。

上記7名によって構成された会長候補者選考委員会は昨年12月1日及び同2日の両日にわたって選考委員会を開催し、協議の結果、南山大学教授・明石陽至氏を第13期東南アジア史学会会長候補に推挙した。

右の結果については、本来、石井米雄選考委員長から御報告されるべきところ、同氏が大会当日海外出張で不在となるため、選挙管理委員会より報告するよう要請があった。これを受けて同管理委員会から同3日に行われた会員総会に報告し、明石氏が満場一致で会長に選出された。

---

### 1989年度秋季会員総会・第12期第6回委員会摘要

---

第12期庶務委員 鈴木恒之

上記総会を1989年12月3日早稲田大学で開催し、白石昌也委員が議長となり、次の議事をはかった。

《報告事項》

1. 生田会長より、第12期会長として就任以来の活動について総括報告がなされた。特

新委員とはすでに2回にわたり、今後の色々な方針を協議いたしました。次期の全体委員会において審議・承認されしだいこれらの方針を総会に諮る所存ですので、会員の皆様の御協力をお願い致します。

---

### 会長選出経過報告

---

第12期選挙管理委員長 奥平龍二

東南アジア史学会第13期会長選出経過につき選挙管理委員会より次のとおり御報告申し上げる。

本会長選出のために設置された選挙管理委員会（奥平龍二、斎藤照子、鈴木恒之、根本敬及び西尾寛治の5名で構成）は、第12期会長生田滋氏の任期満了に伴なう新しい会長選出のための会長候補者選考委員7名の直接選挙を実施した。昨年10月30日付で選挙人名簿（被選挙有資格者）249名分（249通）の投票用紙（4名連記）を発送し、同11月14日回答を締切った。

選挙管理委員会は11月16日上記投票用紙回答分の開票を行った。回答総数118通、投票総数472票（白紙1、3名連記1、1名のみ記載1）で有効な投票総数464票であった。但し、回答締切日を大幅に過ぎて到着した4通は無効とした。右開票の結果、生田滋、池端雪浦、石井米雄、石沢良昭、桜井由躬雄、土屋健治及び山本達郎（以上50音図順）の7名の各氏が会長候補者選考委員に選出された。そのうち、桜井、土屋両氏が海外出張のため、「東南アジア史学会役員選出規則」第3条2項に則り、次点者3名の中から抽選により、吉川利治及び鈴木恒之の両氏が繰上げ当選となった。

上記7名によって構成された会長候補者選考委員会は昨年12月1日及び同2日の両日にわたって選考委員会を開催し、協議の結果、南山大学教授・明石陽至氏を第13期東南アジア史学会会長候補に推挙した。

右の結果については、本来、石井米雄選考委員長から御報告されるべきところ、同氏が大会当日海外出張で不在となるため、選挙管理委員会より報告するよう要請があった。これを受けて同管理委員会から同3日に行われた会員総会に報告し、明石氏が満場一致で会長に選出された。

---

### 1989年度秋季会員総会・第12期第6回委員会摘要

---

第12期庶務委員 鈴木恒之

上記総会を1989年12月3日早稲田大学で開催し、白石昌也委員が議長となり、次の議事をはかった。

《報告事項》

1. 生田会長より、第12期会長として就任以来の活動について総括報告がなされた。特

新委員とはすでに2回にわたり、今後の色々な方針を協議いたしました。次期の全体委員会において審議・承認されしだいこれらの方針を総会に諮る所存ですので、会員の皆様の御協力をお願い致します。

---

### 会長選出経過報告

---

第12期選挙管理委員長 奥平龍二

東南アジア史学会第13期会長選出経過につき選挙管理委員会より次のとおり御報告申し上げる。

本会長選出のために設置された選挙管理委員会（奥平龍二、斎藤照子、鈴木恒之、根本敬及び西尾寛治の5名で構成）は、第12期会長生田滋氏の任期満了に伴なう新しい会長選出のための会長候補者選考委員7名の直接選挙を実施した。昨年10月30日付で選挙人名簿（被選挙有資格者）249名分（249通）の投票用紙（4名連記）を発送し、同11月14日回答を締切った。

選挙管理委員会は11月16日上記投票用紙回答分の開票を行った。回答総数118通、投票総数472票（白紙1、3名連記1、1名のみ記載1）で有効な投票総数464票であった。但し、回答締切日を大幅に過ぎて到着した4通は無効とした。右開票の結果、生田滋、池端雪浦、石井米雄、石沢良昭、桜井由躬雄、土屋健治及び山本達郎（以上50音図順）の7名の各氏が会長候補者選考委員に選出された。そのうち、桜井、土屋両氏が海外出張のため、「東南アジア史学会役員選出規則」第3条2項に則り、次点者3名の中から抽選により、吉川利治及び鈴木恒之の両氏が繰上げ当選となった。

上記7名によって構成された会長候補者選考委員会は昨年12月1日及び同2日の両日にわたって選考委員会を開催し、協議の結果、南山大学教授・明石陽至氏を第13期東南アジア史学会会長候補に推挙した。

右の結果については、本来、石井米雄選考委員長から御報告されるべきところ、同氏が大会当日海外出張で不在となるため、選挙管理委員会より報告するよう要請があった。これを受けて同管理委員会から同3日に行われた会員総会に報告し、明石氏が満場一致で会長に選出された。

---

### 1989年度秋季会員総会・第12期第6回委員会摘要

---

第12期庶務委員 鈴木恒之

上記総会を1989年12月3日早稲田大学で開催し、白石昌也委員が議長となり、次の議事をはかった。

《報告事項》

1. 生田会長より、第12期会長として就任以来の活動について総括報告がなされた。特

に、活動記録・文書の作成・保存、学会財産の調査・管理、会員獲得活動、地区例会・研究会への参加、会員著作論文目録補遺の発行、会員名簿の改訂・発行等。

例会開催に必要とする会場借料実費を、とりあえず年間30,000円を限度として補助することを提案し、了承された。

また、委員会内に設けられた将来計画検討委員会より報告を得、その内容を次期委員会に申し送り、検討を加えてもらうことが報告された。

2. 庶務委員より、会員総数316名（1989年11月現在）、学会会報51号発行（1989年11月）、会員名簿の改訂・発行（1989年10月）、同名簿を全会員に一部を無料配布、残部約100部は1部1,000円にて販売する、との報告があった。
3. 会計委員より、1989年度会計中間報告（1989年11月現在）がなされた。
4. 編集委員より、『東南アジア—歴史と文化—』第19号の編集進行状況が報告された。
5. 関東、中部、関西、中国・四国各地区委員より、各地区の例会・研究会開催の状況について報告された。

#### 《協議事項》

1. 第13期会長候補者選考委員選挙管理委員長より、選挙の結果について報告がなされた。引続き、会長候補者選考委員長（代理）より、選考経過と結果について報告があり、第13期会長候補者として会員の明石陽至氏を推薦する旨の提議がなされ、原案通りこれを決定した。続いて新会長より就任の挨拶があった。その後、中村孝志会員より生田滋会長への謝辞が述べられた。

#### 第12期第6回委員会

1989年12月2日、早稲田大学、出席者20名

3日、 ク 19名

会長が議長となり、上記総会案件を審議決定した。

---

#### 第42回研究大会報告

---

東南アジア史学会第42回研究大会は1989年12月2日と3日の両日、早稲田大学本部キャンパスで開催された。

プログラムは以下の通りである。

12月2日(土) 於：7号館329教室

13:10 開会の辞

後藤乾一大会準備委員長（早稲田大学）

#### 個人研究発表

13:20 幻のガルー王国—訶陵国考

—インドネシア古代史への新展望—

富尾武弘（摂南大学）

- 14:00 18世紀後期フィリピンの社会経済変革  
—総督アランディアの中国人追放— 菅谷成子（名古屋女子短期大学）
- 14:40 フィリピンにおけるブローカー依存型国民統合体制の成立  
—1950年代ムスリム・エリートの役割を中心に— 川島 緑（東京大学院生）
- 15:20 休憩
- 15:40 印刷されたスンダの物語  
—19世紀以降の西ジャワの文学をめぐって— 森山幹弘（スンダ文学研究者）
- 16:20 千年王国運動における伝統の復権  
—バタック地区（北スマトラ）のパルフダムダム運動（1915-17）— 弘末雅士（ユネスコ東アジア文化研究センター）
- 17:00 インドネシア、スルタンIX世の死のディスコース（その1） 中島成久（法政大学）

18:00 懇親会

12月3日(日) 於：7号館小野講堂

9:00 受付開始

共通論題「東南アジアにおける共通語の成立と展開」

- 9:30 趣旨説明 吉川 利治（大阪外国語大学）
- 9:40 タイ 村嶋 英治（アジア経済研究所）
- 10:20 ビルマ 大野 徹（大阪外国語大学）
- 11:00 マレーシア 野村 亨（関西外国語大学）
- 11:40 シンガポール 田中 恒子（中部大学）
- 12:20～13:30 昼食、休憩、委員会
- 13:30 会員総会
- 14:30 インドネシア 佐々木重次（東京外国語大学）
- 15:10 総合討論 司会 市川健二郎（大正大学）
- 16:30 閉会の辞

## 個人研究発表要旨

### 幻のガルー王国

富尾武弘

中国の唐代の史料に見える「訶陵」は荻原雲来「漢訳対照梵和大辞典」(鈴木学術財団)を参照し、実際の用例に基づき音韻的要素を追求すれば「ガルー」に比定できる。まさに、元史に見える「葛郎」である。ジャワ人は、発音に際し無声音化する傾向がある。本来の音は「ガルー」である。先の「古代のジャワとスマトラ」(摂大学術B. No. 7)で、「訶陵」を中部ジャワ内陸部マタラムの地に求めた。ジャワ古代碑文に見える「マタラム」は地名に基づくもので、本来の王国名は「ガルー」である。

「ガルー」王国といえば、西部ジャワに伝わる「チャリタ・パラヒヤンガン」にのみ伝わる王国名であった。この王国は、13世紀末に成立するマジャパヒト朝以前に迄存続していたのであるが、ジャワ人の脳裏からは、このマジャパヒト期とこれに続くイムラム化の時代の中で、この王国名すら忘れられてしまい、西ジャワのスンダ人の中に生き続けていたのである。今、「訶陵」が「ガルー」であることが確証され、「パラヒヤンガン物語」の史料的価値が見直されるのは当然である。

ジャワで年代が記せられた最古の碑文は、732年のサンジャヤ王のチャンガル碑文である。このサンジャヤの名は907年のバリトゥン王のマンティヤーシI碑文にマタラム王として再び現れる。これら2碑文と、「パラヒヤンガン物語」のガルー王国のサンジャヤ王の比較研究は十分に有効である。サンジャヤ王の父スナの国は、王位継承にまつわる内紛とスリイウィジャヤの攻撃という外圧に面し崩壊し、サンジャヤがこれを再建した。その遺跡は、グドン・ソンゴ寺院群と考えられる。一方、ディエン高地の古層の寺院群は、サンジャヤ王以前のものである。この2遺跡の間には、交通路の変遷という問題を考えねばならない。すなわち、内陸部からパラカン経由でプカロンガンに至るルートが、ディエンに関係するものであり、スラカルタからサラティガ経由でスマランに至るルートがグドン・ソンゴ寺院群と結び付くものである。

中部ジャワのシャイレンドラ朝の密教文化は後者のルートからもたらされたのである。密教文明の到来と共に、「訶陵」は東ジャワに移り、独自の政治・経済基盤を確立し、唐朝への遣使をも再開する。このことは、中部ジャワのシャイレンドラ朝が衰退し、インドネシア史における東部ジャワ時代が円滑に始まるうえで重要なことであった。すなわち、東遷した「訶陵」は、中部ジャワの政権が崩壊せんとしたときに、それを引き受けられるほどの受け皿を形成していたのである。

### 18世紀後期フィリピンの社会経済変革

—総督アランディアの中国人追放—

菅谷成子

18世紀半ば頃よりマニラを中心として徐々に「世界システム」に包摂されていったフィリピン諸島はそれに伴って広範な社会経済変革を経験した。すなわち、16世紀以来の制限的なマニラ-アカブルコ間のガレオン貿易体制を基本とする植民地の社会経済秩序

## 個人研究発表要旨

### 幻のガルー王国

富尾武弘

中国の唐代の史料に見える「訶陵」は荻原雲来「漢訳対照梵和大辞典」(鈴木学術財団)を参照し、実際の用例に基づき音韻的要素を追求すれば「ガルー」に比定できる。まさに、元史に見える「葛郎」である。ジャワ人は、発音に際し無声音化する傾向がある。本来の音は「ガルー」である。先の「古代のジャワとスマトラ」(摂大学術B. No. 7)で、「訶陵」を中部ジャワ内陸部マタラムの地に求めた。ジャワ古代碑文に見える「マタラム」は地名に基づくもので、本来の王国名は「ガルー」である。

「ガルー」王国といえば、西部ジャワに伝わる「チャリタ・パラヒヤンガン」にのみ伝わる王国名であった。この王国は、13世紀末に成立するマジャパヒト朝以前に迄存続していたのであるが、ジャワ人の脳裏からは、このマジャパヒト期とこれに続くイムラム化の時代の中で、この王国名すら忘れられてしまい、西ジャワのスンダ人の中に生き続けていたのである。今、「訶陵」が「ガルー」であることが確証され、「パラヒヤンガン物語」の史料的価値が見直されるのは当然である。

ジャワで年代が記せられた最古の碑文は、732年のサンジャヤ王のチャンガル碑文である。このサンジャヤの名は907年のバリトゥン王のマンティヤーシI碑文にマタラム王として再び現れる。これら2碑文と、「パラヒヤンガン物語」のガルー王国のサンジャヤ王の比較研究は十分に有効である。サンジャヤ王の父スナの国は、王位継承にまつわる内紛とスリイウィジャヤの攻撃という外圧に面し崩壊し、サンジャヤがこれを再建した。その遺跡は、グドン・ソンゴ寺院群と考えられる。一方、ディエン高地の古層の寺院群は、サンジャヤ王以前のものである。この2遺跡の間には、交通路の変遷という問題を考えねばならない。すなわち、内陸部からパラカン経由でプカロンガンに至るルートが、ディエンに関係するものであり、スラカルタからサラティガ経由でスマランに至るルートがグドン・ソンゴ寺院群と結び付くものである。

中部ジャワのシャイレンドラ朝の密教文化は後者のルートからもたらされたのである。密教文明の到来と共に、「訶陵」は東ジャワに移り、独自の政治・経済基盤を確立し、唐朝への遣使をも再開する。このことは、中部ジャワのシャイレンドラ朝が衰退し、インドネシア史における東部ジャワ時代が円滑に始まるうえで重要なことであった。すなわち、東遷した「訶陵」は、中部ジャワの政権が崩壊せんとしたときに、それを引き受けられるほどの受け皿を形成していたのである。

### 18世紀後期フィリピンの社会経済変革

—総督アランディアの中国人追放—

菅谷成子

18世紀半ば頃よりマニラを中心として徐々に「世界システム」に包摂されていったフィリピン諸島はそれに伴って広範な社会経済変革を経験した。すなわち、16世紀以来の制限的なマニラ-アカブルコ間のガレオン貿易体制を基本とする植民地の社会経済秩序

が崩壊していく一方、新しい秩序が形成されていった。国際的な貿易構造の変化に伴って、英仏米などの商人が次々とマニラ貿易に進出し、フィリピン諸島産の物資を買い付けることが盛んとなった。これに応じて、フィリピン諸島内では、インディゴ、砂糖、アバカなどの商品作物の栽培が奨励され、さらにこれらの商品作物などの集荷や外国商人が齎らす輸入品の販売網の整備が進み、諸島内交易が盛んとなった。諸島交易に積極的に進出することにより中国系の混血人、メスティーソは、経済力を蓄え社会的地位を高めていった。

本発表においては、当時の具体的な社会経済変化の様相やメスティーソの興隆の過程に焦点をあてるのではなく、その興隆の契機を提供したと考えられている1755年の総督アランディアが実施した非キリスト教徒中国人の追放令を取り上げ、その追放がなされた背景を、フィリピン政府の対中国人政策の変化とその当時の国際貿易構造の変化、特に南シナ海貿易における福建-マニラ間貿易の推移との関わりという点から検討する。またその実施の実態やその効果についても若干の考察を行なう。

福建-マニラ間の中国帆船貿易はガレオン貿易体制の確立とともにアカブルコへの中継輸出品である生糸や絹織物、陶磁器などを供給するとともに、マニラを中心としたスペイン人植民者の日常必需物資やサービスを提供する多数の中国人をも供給した。ガレオン貿易の隆盛に伴い中国帆船貿易も盛んになり、多数の中国人がマニラのパリアンに居住してフィリピン政府の財政を潤した。しかしながら、ガレオン貿易体制の衰退とともに中国帆船貿易も下降線をたどり、また在住中国人の地方分散傾向に拍車がかかった。このため、政府にとって、植民地内の中国人の存在は「貴重な収入源」から地方の経済活動を独占しつつその治安を乱す存在としての側面が際立つものになった。このような状況のもとにアランディアの追放令が実施されたのである。

## フィリピンにおけるブローカー依存型国民統合体制の成立 —1950年代ムスリム・エリートの役割を中心に— 川島 緑

1950～60年代のフィリピンでは、南部のムスリムや他の少数民族に対し、教育や社会・経済事業を通じて、彼らの国家への参加を促進する「国民統合政策」が実施された。この体制を象徴する公的機関は、1957年に、3名のムスリム国會議員の提案に基づいて設立された「国民統合委員会」であった。独立後の南部ムスリム社会の頂点に位置していたムスリム国會議員は、基本的に植民地期以来のムスリム政治家の系譜に属し、西洋式大学教育を受け、中央の政治エリートと共に価値観や規範を身に付けており、中央の有力政治家と同盟関係を結んでいた。その一方、彼らは、支配を正統化する原理をイスラームから得ており、イスラーム的正義の実践者として振る舞う必要があった。彼らは、西洋の自由主義政治原理を掲げるフィリピン国家の権力機構と、イスラーム的政治原理に支配されるムスリム社会との接点に位置を占めていた。そして、これらの二つの異なる世界の間の関係を独占的に掌握し、そこから、特権的地位や利益を得ており、一種のブローカーとしての役割を果していた。

が崩壊していく一方、新しい秩序が形成されていった。国際的な貿易構造の変化に伴って、英仏米などの商人が次々とマニラ貿易に進出し、フィリピン諸島産の物資を買い付けることが盛んとなった。これに応じて、フィリピン諸島内では、インディゴ、砂糖、アバカなどの商品作物の栽培が奨励され、さらにこれらの商品作物などの集荷や外国商人が齎らす輸入品の販売網の整備が進み、諸島内交易が盛んとなった。諸島交易に積極的に進出することにより中国系の混血人、メスティーソは、経済力を蓄え社会的地位を高めていった。

本発表においては、当時の具体的な社会経済変化の様相やメスティーソの興隆の過程に焦点をあてるのではなく、その興隆の契機を提供したと考えられている1755年の総督アランディアが実施した非キリスト教徒中国人の追放令を取り上げ、その追放がなされた背景を、フィリピン政府の対中国人政策の変化とその当時の国際貿易構造の変化、特に南シナ海貿易における福建-マニラ間貿易の推移との関わりという点から検討する。またその実施の実態やその効果についても若干の考察を行なう。

福建-マニラ間の中国帆船貿易はガレオン貿易体制の確立とともにアカブルコへの中継輸出品である生糸や絹織物、陶磁器などを供給するとともに、マニラを中心としたスペイン人植民者の日常必需物資やサービスを提供する多数の中国人をも供給した。ガレオン貿易の隆盛に伴い中国帆船貿易も盛んになり、多数の中国人がマニラのパリアンに居住してフィリピン政府の財政を潤した。しかしながら、ガレオン貿易体制の衰退とともに中国帆船貿易も下降線をたどり、また在住中国人の地方分散傾向に拍車がかかった。このため、政府にとって、植民地内の中国人の存在は「貴重な収入源」から地方の経済活動を独占しつつその治安を乱す存在としての側面が際立つものになった。このような状況のもとにアランディアの追放令が実施されたのである。

## フィリピンにおけるブローカー依存型国民統合体制の成立 —1950年代ムスリム・エリートの役割を中心に— 川島 緑

1950～60年代のフィリピンでは、南部のムスリムや他の少数民族に対し、教育や社会・経済事業を通じて、彼らの国家への参加を促進する「国民統合政策」が実施された。この体制を象徴する公的機関は、1957年に、3名のムスリム国會議員の提案に基づいて設立された「国民統合委員会」であった。独立後の南部ムスリム社会の頂点に位置していたムスリム国會議員は、基本的に植民地期以来のムスリム政治家の系譜に属し、西洋式大学教育を受け、中央の政治エリートと共に価値観や規範を身に付けており、中央の有力政治家と同盟関係を結んでいた。その一方、彼らは、支配を正統化する原理をイスラームから得ており、イスラーム的正義の実践者として振る舞う必要があった。彼らは、西洋の自由主義政治原理を掲げるフィリピン国家の権力機構と、イスラーム的政治原理に支配されるムスリム社会との接点に位置を占めていた。そして、これらの二つの異なる世界の間の関係を独占的に掌握し、そこから、特権的地位や利益を得ており、一種のブローカーとしての役割を果していた。

フィリピンの国民統合体制は、理念の上では、近代化、統合、世俗主義などのアメリカ的な価値を掲げ、動員・融合型の統合体制の確立を謳っていた。しかし、その実態は、プローカーであるムスリム・エリートに依存するものであり、南部の独自性を維持、強化する面を持っていた。国民統合委員会は、彼らにとって、多額の国家予算や多数の官職、様々な事業に伴う利権を意味した。これらを掌握することは、ムスリム・エリートの報償提供能力を著しく高め、その政治的影響力を強化することになった。結局、国民統合委員会は、彼らのプローカー的立場を強化する装置であり、「国民統合」は、彼らの特殊な地位を正統化するイデオロギーであった。

## 印刷されたスンダの叙事詩ワワチャン

—19世紀中頃以降の西ジャワの文学をめぐって— 森山幹弘

西ジャワに住むスンダ人の母語であるスンダ語によって書かれたものの中に、定型詩を用いたワワチャン (wawacan) と呼ばれる文学フォームがある。このフォームはジャワから伝わったもので、主に文芸を書き表すために用いられたものであったが、次第に非文芸のものにまで使われるようになり時代を代表する文学フォームとなった。その時代とはスンダ語の印刷物が世に出始める19世紀の半ばから20世紀の半ばである。一方ワワチャンは印刷物においてだけでなく、18世紀頃以降の手で書き写された多くのマニユスクリプトの中にも見ることができる。むしろワワチャンの点数はマニユスクリプトの方が多いと言える。

本報告では、スンダ文学の流れの中でワワチャンがいかなる地位を占めていたのか、ワワチャンを取り巻く文学空間はどのようなものであったのかという問題関心をもって、ワワチャンを軸にしてレイデンの王立言語地理民族学研究所 (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde : 以下 KITLV と略す) の蔵書を基に資料整理を行なうものである。

バタヴィアを中心に行なわれた印刷・出版活動のなかで、スンダ語の出版における19世紀後半の出版公社ラントスドゥルクレイ (Landsdrukkerij), 20世紀前半のパライ・プスタカ (Balai Poestaka) が果たした役割は大きいものであった。一方スンダ語の書き手達は、スンダの核域に居を構える貴族達であり、書かれたものは最も新しいものが集まるバタヴィアへと持ち込まれ印刷された。そして、印刷されたものは再び読者の住むスンダ地方へ、教育システムのルートに乗せられ、あるいはカタログ販売によって、新しいスタイルの読み物 (マニユスクリプトではない) として送り返されていた。このような状況のなかで、ワワチャンは出版点数においても、また当時流行っていたと考えられるタイトルの中でも大きな地位を占めていた。このように19世紀以降の時代を代表する文学フォームであったと考えられるワワチャンを手掛りにスンダ文学をめぐるいくつかの点について考察すると、マレー語の文学が「野放し」 (liar) な文学をパライ・プスタカ設立以前に数多く生み出したのに対し、スンダ文学は官製のものであり、「良く飼い馴らされた」 (jinak) ものしか生み出さなかったと言える。

フィリピンの国民統合体制は、理念の上では、近代化、統合、世俗主義などのアメリカ的な価値を掲げ、動員・融合型の統合体制の確立を謳っていた。しかし、その実態は、プローカーであるムスリム・エリートに依存するものであり、南部の独自性を維持、強化する面を持っていた。国民統合委員会は、彼らにとって、多額の国家予算や多数の官職、様々な事業に伴う利権を意味した。これらを掌握することは、ムスリム・エリートの報償提供能力を著しく高め、その政治的影響力を強化することになった。結局、国民統合委員会は、彼らのプローカー的立場を強化する装置であり、「国民統合」は、彼らの特殊な地位を正統化するイデオロギーであった。

## 印刷されたスンダの叙事詩ワワチャン

—19世紀中頃以降の西ジャワの文学をめぐって— 森山幹弘

西ジャワに住むスンダ人の母語であるスンダ語によって書かれたものの中に、定型詩を用いたワワチャン（wawacan）と呼ばれる文学フォームがある。このフォームはジャワから伝わったもので、主に文芸を書き表すために用いられたものであったが、次第に非文芸のものにまで使われるようになり時代を代表する文学フォームとなった。その時代とはスンダ語の印刷物が世に出始める19世紀の半ばから20世紀の半ばである。一方ワワチャンは印刷物においてだけでなく、18世紀頃以降の手で書き写された多くのマニユスクリプトの中にも見ることができる。むしろワワチャンの点数はマニユスクリプトの方が多いと言える。

本報告では、スンダ文学の流れの中でワワチャンがいかなる地位を占めていたのか、ワワチャンを取り巻く文学空間はどのようなものであったのかという問題関心をもって、ワワチャンを軸にしてレイデンの王立言語地理民族学研究所（Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde：以下 KITLV と略す）の蔵書を基に資料整理を行なうものである。

バタヴィアを中心に行なわれた印刷・出版活動のなかで、スンダ語の出版における19世紀後半の出版公社ラントスドゥルクレイ（Landsdrukkerij）、20世紀前半のパライ・プスタカ（Balai Poestaka）が果たした役割は大きいものであった。一方スンダ語の書き手達は、スンダの核域に居を構える貴族達であり、書かれたものは最も新しいものが集まるバタヴィアへと持ち込まれ印刷された。そして、印刷されたものは再び読者の住むスンダ地方へ、教育システムのルートに乗せられ、あるいはカタログ販売によって、新しいスタイルの読み物（マニユスクリプトではない）として送り返されていた。このような状況のなかで、ワワチャンは出版点数においても、また当時流行っていたと考えられるタイトルの中でも大きな地位を占めていた。このように19世紀以降の時代を代表する文学フォームであったと考えられるワワチャンを手掛りにスンダ文学をめぐるいくつかの点について考察すると、マレー語の文学が「野放し」（liar）な文学をパライ・プスタカ設立以前に数多く生み出したのに対し、スンダ文学は官製のものであり、「良く飼い馴らされた」（jinak）ものしか生み出さなかったと言える。

## 千年王国運動における伝統の復権

—バタック地区(北スマトラ)のパルフダムダム運動 (1915-17) — —弘末雅士

パルフダムダム運動は、オランダ植民地支配の強化に反抗したバタック族が、彼らの神聖王（シ＝シンガ＝マンガラジャ）の復活した理想世を待望した運動である。運動に参加した信者達は、バタック族の至高神やシ＝シンガ＝マンガラジャより不死身の力を授けられたと信じ、理想世の実現のためオランダ政府に戦いを挑んだ。だが、結果は、信者らの期待に反し、政府軍の武器の前に死傷を余儀なくされた。運動は、1915-17年に隆盛した後、急速に衰退した。

報告者は、ここでこの運動における「不死身」の術やシ＝シンガ＝マンガラジャ信仰が、信者らにとって如何なる意味を有していたのかを考察する。まず始めに、1910年代中葉のスマトラで、「イスラム同盟」の運動を中心とするイスラム教徒の反植民地主義が高揚していたことを説明する。こうした中で、パルフダムダム運動の創始者が、バタック族の間で意義を失いかけていた不死身の術（hahobolon）や降霊術（hasiaron）をイスラム教の秘儀を用いて、至高神の力に与るための手段として蘇生させたことを論じる。そして、植民地政府軍の前に敗北したシ＝シンガ＝マンガラジャが、信者達の間で至高神よりバタック族を解放に導くための新たな力を授けられた存在と見なされ、植民地権力に対抗できる原理として復権したことを説明する。最後に、この運動の教義が、植民地的環境下で育った若年層に最も支持を得たことを考察する。

本発表を通して報告者は、パルフダムダム運動のよう植民地支配の比較的後期に起きた千年王国運動において、消滅しつつある伝統が新たな意義を与えられて復権し、反植民地主義の旗印として前面に掲げられることを指摘したい。これにより、人々は現状を変革するための手段が他にある場合でも、しばしばこうした運動に引きつけられることを示したい。

## インドネシア、スルタンIX世の死のディスコース

(その1)

中島成久

昨年(1988年)9月以来日本では昭和天皇の病状悪化にともなう「自肃ムード」が高まつた。それに呼応するかのようにインドネシア(特にジョクジャカルタ)においても、インドネシア独立革命の英雄の一人であるスルタン・ハメンクブウォノIX世の突然の死(1988年10月3日)は人々に大きな衝撃を与えた。ジョクジャカルタの地方紙「クダウラタン・ラヤット」は、ほぼ2週間スルタン関係の記事で埋まり、高級週刊誌と評判の高い『テンポ』も4回にわたってスルタンの死の特集号を組んだ。

天皇やスルタンIX世といった例に限らず、一般に政治的指導者の死をいかに演出するかということは、各政治勢力にとって大きな問題である。今回はたまたま、昭和天皇とスルタンIX世という「最後の神聖王」の偶然による同時期の死ということで、ギアツのいう「劇場国家」を髣髴させる状況が、日本とインドネシア双方で出現した。そこで問

## 千年王国運動における伝統の復権

—バタック地区(北スマトラ)のパルフダムダム運動 (1915-17) — —弘末雅士

パルフダムダム運動は、オランダ植民地支配の強化に反抗したバタック族が、彼らの神聖王（シ＝シンガ＝マンガラジャ）の復活した理想世を待望した運動である。運動に参加した信者達は、バタック族の至高神やシ＝シンガ＝マンガラジャより不死身の力を授けられたと信じ、理想世の実現のためオランダ政府に戦いを挑んだ。だが、結果は、信者らの期待に反し、政府軍の武器の前に死傷を余儀なくされた。運動は、1915-17年に隆盛した後、急速に衰退した。

報告者は、ここでこの運動における「不死身」の術やシ＝シンガ＝マンガラジャ信仰が、信者らにとって如何なる意味を有していたのかを考察する。まず始めに、1910年代中葉のスマトラで、「イスラム同盟」の運動を中心とするイスラム教徒の反植民地主義が高揚していたことを説明する。こうした中で、パルフダムダム運動の創始者が、バタック族の間で意義を失いかけていた不死身の術（hahobolon）や降霊術（hasiaron）をイスラム教の秘儀を用いて、至高神の力に与るための手段として蘇生させたことを論じる。そして、植民地政府軍の前に敗北したシ＝シンガ＝マンガラジャが、信者達の間で至高神よりバタック族を解放に導くための新たな力を授けられた存在と見なされ、植民地権力に対抗できる原理として復権したことを説明する。最後に、この運動の教義が、植民地的環境下で育った若年層に最も支持を得たことを考察する。

本発表を通して報告者は、パルフダムダム運動のよう植民地支配の比較的後期に起きた千年王国運動において、消滅しつつある伝統が新たな意義を与えられて復権し、反植民地主義の旗印として前面に掲げられることを指摘したい。これにより、人々は現状を変革するための手段が他にある場合でも、しばしばこうした運動に引きつけられることを示したい。

## インドネシア、スルタンIX世の死のディスコース

(その1)

中島成久

昨年(1988年)9月以来日本では昭和天皇の病状悪化にともなう「自肃ムード」が高まつた。それに呼応するかのようにインドネシア(特にジョクジャカルタ)においても、インドネシア独立革命の英雄の一人であるスルタン・ハメンクブウォノIX世の突然の死(1988年10月3日)は人々に大きな衝撃を与えた。ジョクジャカルタの地方紙「クダウラタン・ラヤット」は、ほぼ2週間スルタン関係の記事で埋まり、高級週刊誌と評判の高い『テンポ』も4回にわたってスルタンの死の特集号を組んだ。

天皇やスルタンIX世といった例に限らず、一般に政治的指導者の死をいかに演出するかということは、各政治勢力にとって大きな問題である。今回はたまたま、昭和天皇とスルタンIX世という「最後の神聖王」の偶然による同時期の死ということで、ギアツのいう「劇場国家」を髣髴させる状況が、日本とインドネシア双方で出現した。そこで問

題となるのは、その死がいかに演出され、人々はどのようにそれを理解したかということである。天皇の死をめぐる日本のディスコース分析はなされているが、インドネシアの事例分析は殆どなされておらず、また両者の関連性も注目されていない。

M・フーコーはいう。「ディスコースは闘争や支配体系を転写するのみでなく、闘争や支配体系を求めるあるいはそれによる闘いそのものである。ディスコースとは獲得されるべきパワーである」(The Order of Discourse, in "Untying the Text")。こういう視点でディスコースを捉えるならば、スルタンIX世の死はインドネシアでどのように演出（報道を含む）され、それがどのような意味を持つのかの分析は、我々に単にインドネシアの事例分析にとどまらないものを示してくれるだろう。

### 共通論題—「東南アジアにおける共通語の成立と展開」

タ イ

村嶋英治

ルアン・ウィチット副外相および外務省顧問ワン親王は共同で作成し、1942年3月ピブーン首相に提出した『在タイ中国人規制』と題した意見書の一部で、要旨「タイの隣国での英仏の統治方式は植民地式、即ち民族を重要視せず経済を重用する方式である。それで中国人を自らの長をもつ自由な集団として扱いその長を通じて統治している。中国人はそのため土着人に比べ権勢が強い。このような中國をつくらすことをタイはすべきでない。ナショナリズム政策が始まる以前のタイの中国人統治では中国人に求めたのは平穏維持と便益のみであり、植民地に似ていた。」と述べている。

上記引用文は、①タイが近隣植民地国に意識的に先んじて中国人同化というナショナリズム政策を実施したこと、および②この政策以前は中国人にタイ人とは異なるエスニックグループとしての自律性が認められていたことを示す。第2の点はナショナリズム以前においては中国人に限らず中央政府からラーオと呼ばれた北・東北タイ住民やケークと呼ばれたマレー系イスラム教徒についてもあてはまる。

首都バンコクで使用されるタイ語の各エスニックグループへの学習強制は、1918年私立学校法、1921年初等教育法（義務教育法）によって始まる。しかし、1932年以前においては、タイ語の強制は各グループの言語の否定ではなかった。たとえば華校では中国語による授業に加え、週5時間のタイ語授業が強制されたに過ぎない。これに比し義務教育の完全実施を目指した1932年立憲革命後の政府のタイ語教育の強制は強力で、1935年1月プラ・サラサートポラパン文相は義務教育年齢の児童全てにタイ語教育校への入学を義務づける通達を出した。これが失敗すると翌36年にはタイ語授業週20時間、中国語5時間半と定めた。更にピブーン首相時代の1939年には全ての華校は閉校された。同時に文明国には地域的差異があってはならないと考えるピブーン首相は、全国民の使用言語を中央タイ語で統一することに努めた。

題となるのは、その死がいかに演出され、人々はどのようにそれを理解したかということである。天皇の死をめぐる日本のディスコース分析はなされているが、インドネシアの事例分析は殆どなされておらず、また両者の関連性も注目されていない。

M・フーコーはいう。「ディスコースは闘争や支配体系を転写するのみでなく、闘争や支配体系を求めるあるいはそれによる闘いそのものである。ディスコースとは獲得されるべきパワーである」(The Order of Discourse, in "Untying the Text")。こういう視点でディスコースを捉えるならば、スルタンIX世の死はインドネシアでどのように演出（報道を含む）され、それがどのような意味を持つのかの分析は、我々に単にインドネシアの事例分析にとどまらないものを示してくれるだろう。

## 共通論題—「東南アジアにおける共通語の成立と展開」

タ イ

村嶋英治

ルアン・ウィチット副外相および外務省顧問ワン親王は共同で作成し、1942年3月ピブーン首相に提出した『在タイ中国人規制』と題した意見書の一部で、要旨「タイの隣国での英仏の統治方式は植民地式、即ち民族を重要視せず経済を重用する方式である。それで中国人を自らの長をもつ自由な集団として扱いその長を通じて統治している。中国人はそのため土着人に比べ権勢が強い。このような中國をつくらすことをタイはすべきでない。ナショナリズム政策が始まる以前のタイの中国人統治では中国人に求めたのは平穏維持と便益のみであり、植民地に似ていた。」と述べている。

上記引用文は、①タイが近隣植民地国に意識的に先んじて中国人同化というナショナリズム政策を実施したこと、および②この政策以前は中国人にタイ人とは異なるエスニックグループとしての自律性が認められていたことを示す。第2の点はナショナリズム以前においては中国人に限らず中央政府からラーオと呼ばれた北・東北タイ住民やケークと呼ばれたマレー系イスラム教徒についてもあてはまる。

首都バンコクで使用されるタイ語の各エスニックグループへの学習強制は、1918年私立学校法、1921年初等教育法（義務教育法）によって始まる。しかし、1932年以前においては、タイ語の強制は各グループの言語の否定ではなかった。たとえば華校では中国語による授業に加え、週5時間のタイ語授業が強制されたに過ぎない。これに比し義務教育の完全実施を目指した1932年立憲革命後の政府のタイ語教育の強制は強力で、1935年1月プラ・サラサートポラパン文相は義務教育年齢の児童全てにタイ語教育校への入学を義務づける通達を出した。これが失敗すると翌36年にはタイ語授業週20時間、中国語5時間半と定めた。更にピブーン首相時代の1939年には全ての華校は閉校された。同時に文明国には地域的差異があってはならないと考えるピブーン首相は、全国民の使用言語を中央タイ語で統一することに努めた。

## 公用語成立の過程—ビルマの場合— 大野 徹

ビルマ（1989年6月以降「ミャンマー」と改名）は、多民族国家であるから、「共通語」という曖昧な概念で見るより、強制力を伴う「公用語」という観点から見た方が、国家という枠組みの中では、より現実的である様に思われる。独立直前の1947年に起草された旧憲法で公用語と定められたのは、ビルマ語であった（第216条）。その後、4半世紀たった1974年に制定された新憲法でも、公用語に指定されたのはビルマ語であった（第198条）。今日、新聞、雑誌などの定期刊行物は勿論のこと、テレビやラジオで使われている言語もまた、ビルマ語である。更にまた、小学校から大学に至るまでの教育界においても、授業で使われているのはビルマ語であり、教科書もビルマ語で書かれている。ビルマ語がビルマの公用語であるということは、ビルマ語を母語とするビルマ民族が国民の68パーセントを占めているという事実からみて合理性があると言える。

ビルマ語公用語化の過程は、1948年のビルマ独立以前はビルマが英領植民地であったという歴史的事実から、民族主義運動と密接な関わりを持っている。ビルマ語使用の訴えは1930年に結成された「我等ビルマ人連盟」による「ビルマは我等の国、ビルマ語は我等の言葉、ビルマ文字は我等の文字」という連盟の設立趣意書の中で初めて明らかにされた。1948年のビルマ独立後、ビルマ語の教科書編纂を目的とする翻訳局の設置、国立学校に於ける全教科のビルマ語による教育などが定められた。試験も英語ではなくビルマ語で行なうように改められた。1964年には大学が改編され、大学での教育もまた全科目ビルマ語で行なわれる事になった。

ビルマ語の公用語化はこうして達成されたが、ビルマ民族以外の少数民族に対する配慮という点から見ると、多くの問題を残している。学校教育は全てビルマ語で行なわれ、本来2言語使用者であった少数民族の児童生徒は、次第に单一言語使用者と化し、非ビルマ語の使用が急速に衰退しつつある。ビルマ語の公用語化は、政治的国民統合という点では大きな功績を上げたが、少数民族による少数民族の文化制圧という予期しなかった結果ももたらしたのである。カレン族、シャン族、カチン族、モン族といった少数民族によるビルマからの分離、独立運動が1948年のビルマ独立以来今日まで一環して続けられている背景には、少数民族ビルマ族への強い不信感が少数民族の側にあることを明白に物語っている。

## シンガポールの言語統合 田中恭子

### 1. 戦前の言語状況

- (1) 多言語・複合社会（英語とヴァナキュラー）
- (2) 言語別教育制度（英語・マレー語・華語・タミル語）
- (3) 問題点（アイデンティティの分裂・共産党問題など）

### 2. 戦後の教育政策

## 公用語成立の過程—ビルマの場合— 大野 徹

ビルマ（1989年6月以降「ミャンマー」と改名）は、多民族国家であるから、「共通語」という曖昧な概念で見るより、強制力を伴う「公用語」という観点から見た方が、国家という枠組みの中では、より現実的である様に思われる。独立直前の1947年に起草された旧憲法で公用語と定められたのは、ビルマ語であった（第216条）。その後、4半世紀たった1974年に制定された新憲法でも、公用語に指定されたのはビルマ語であった（第198条）。今日、新聞、雑誌などの定期刊行物は勿論のこと、テレビやラジオで使われている言語もまた、ビルマ語である。更にまた、小学校から大学に至るまでの教育界においても、授業で使われているのはビルマ語であり、教科書もビルマ語で書かれている。ビルマ語がビルマの公用語であるということは、ビルマ語を母語とするビルマ民族が国民の68パーセントを占めているという事実からみて合理性があると言える。

ビルマ語公用語化の過程は、1948年のビルマ独立以前はビルマが英領植民地であったという歴史的事実から、民族主義運動と密接な関わりを持っている。ビルマ語使用の訴えは1930年に結成された「我等ビルマ人連盟」による「ビルマは我等の国、ビルマ語は我等の言葉、ビルマ文字は我等の文字」という連盟の設立趣意書の中で初めて明らかにされた。1948年のビルマ独立後、ビルマ語の教科書編纂を目的とする翻訳局の設置、国立学校に於ける全教科のビルマ語による教育などが定められた。試験も英語ではなくビルマ語で行なうように改められた。1964年には大学が改編され、大学での教育もまた全科目ビルマ語で行なわれる事になった。

ビルマ語の公用語化はこうして達成されたが、ビルマ民族以外の少数民族に対する配慮という点から見ると、多くの問題を残している。学校教育は全てビルマ語で行なわれ、本来2言語使用者であった少数民族の児童生徒は、次第に单一言語使用者と化し、非ビルマ語の使用が急速に衰退しつつある。ビルマ語の公用語化は、政治的国民統合という点では大きな功績を上げたが、少数民族による少数民族の文化制圧という予期しなかった結果ももたらしたのである。カレン族、シャン族、カチン族、モン族といった少数民族によるビルマからの分離、独立運動が1948年のビルマ独立以来今日まで一環して続けられている背景には、少数民族ビルマ族への強い不信感が少数民族の側にあることを明白に物語っている。

## シンガポールの言語統合 田中恭子

### 1. 戦前の言語状況

- (1) 多言語・複合社会（英語とヴァナキュラー）
- (2) 言語別教育制度（英語・マレー語・華語・タミル語）
- (3) 問題点（アイデンティティの分裂・共産党問題など）

### 2. 戦後の教育政策

- (1) 英語を共通語とする国民統合政策
- (2) 英校の増加・ヴァナキュラー校の相対的衰退
- (3) 華人社会の反発と共産党問題（非常事態）

### 3. 長期的言語政策の確立

- (1) 全党派委員会報告 1955
- (2) 四言語の平等と二言語教育
- (3) 英語を共通語とする国民統合の必然性

### 4. PAP の言語政策とその成果

- (1) マラヤ統合のための三言語教育 1960-65年代
- (2) 経済発展のための英語優先政策 1965-70年代
- (3) ヴァナキュラー校の消滅 1986
- (4) 「アジアの価値観」と二言語教育の強化 70年代以降
- (5) 「華語を話そう」運動 1978以降

## インドネシア語の場合

佐々木重次

古くからこの群島世界の交易語、共通語として他の言語の追従を許さない長い歴史を持つマレー語は植民地時代には植民地政府の準公用語の地位を与えられていたが、20世紀のインドネシア民族主義の台頭と共に「祖国インドネシア」の民族統合の言語、「インドネシア語」となって独立国家の国語への道を歩んだ。

今日のインドネシア語の普及率は全国平均で約60%。ジャワ、バリなどの強大な地方語圏に100%普及するにはあと半世紀以上かかると推測されている。国はインドネシア語の普及に努めると共に、地方語を民族文化の一部として尊重する政策をとっている。小学校の教育言語は1975年カリキュラムにより1年からインドネシア語によると定められているが、例えば西ジャワ州政府は独自の決定で4年よりとしている。

国民の多くが国語インドネシア語と地方語の二言語使用者となる状況のなかで、インドネシア語の地域方言的なかたちが成立し始める一方で、地方語がインドネシア語の強い影響を被って純粹さを失いつつあると嘆く声も聞かれる。文学者たちの場合、両方の言語で創作活動をするもの（なかには、母語である地方語で純文学を、インドネシア語では金になる風俗小説を、というような使い分け方がある）と、インドネシア語だけで創作活動をするものがいる。最大の地方語ジャワ語を母語とする文学者は後者のタイプが多いが、しばしば自分の母語をまじえ過ぎるとの批判を受けもしている。

1988年は「ひとつの祖国、ひとつの民族、ひとつの言語」を誓った1928年の「青年の誓い」60周年を記念する第5回インドネシア語会議が「開発のコンテキストにおいて統一語を尊重する」をテーマに開かれた。第1回会議よりの宿題であった辞書、文法書が刊行された。

- (1) 英語を共通語とする国民統合政策
- (2) 英校の増加・ヴァナキュラー校の相対的衰退
- (3) 華人社会の反発と共産党問題（非常事態）

### 3. 長期的言語政策の確立

- (1) 全党派委員会報告 1955
- (2) 四言語の平等と二言語教育
- (3) 英語を共通語とする国民統合の必然性

### 4. PAP の言語政策とその成果

- (1) マラヤ統合のための三言語教育 1960-65年代
- (2) 経済発展のための英語優先政策 1965-70年代
- (3) ヴァナキュラー校の消滅 1986
- (4) 「アジアの価値観」と二言語教育の強化 70年代以降
- (5) 「華語を話そう」運動 1978以降

## インドネシア語の場合

佐々木重次

古くからこの群島世界の交易語、共通語として他の言語の追従を許さない長い歴史を持つマレー語は植民地時代には植民地政府の準公用語の地位を与えられていたが、20世紀のインドネシア民族主義の台頭と共に「祖国インドネシア」の民族統合の言語、「インドネシア語」となって独立国家の国語への道を歩んだ。

今日のインドネシア語の普及率は全国平均で約60%。ジャワ、バリなどの強大な地方語圏に100%普及するにはあと半世紀以上かかると推測されている。国はインドネシア語の普及に努めると共に、地方語を民族文化の一部として尊重する政策をとっている。小学校の教育言語は1975年カリキュラムにより1年からインドネシア語によると定められているが、例えば西ジャワ州政府は独自の決定で4年よりとしている。

国民の多くが国語インドネシア語と地方語の二言語使用者となる状況のなかで、インドネシア語の地域方言的なかたちが成立し始める一方で、地方語がインドネシア語の強い影響を被って純粹さを失いつつあると嘆く声も聞かれる。文学者たちの場合、両方の言語で創作活動をするもの（なかには、母語である地方語で純文学を、インドネシア語では金になる風俗小説を、というような使い分け方がある）と、インドネシア語だけで創作活動をするものがいる。最大の地方語ジャワ語を母語とする文学者は後者のタイプが多いが、しばしば自分の母語をまじえ過ぎるとの批判を受けもしている。

1988年は「ひとつの祖国、ひとつの民族、ひとつの言語」を誓った1928年の「青年の誓い」60周年を記念する第5回インドネシア語会議が「開発のコンテキストにおいて統一語を尊重する」をテーマに開かれた。第1回会議よりの宿題であった辞書、文法書が刊行された。

## 華僑・華人研究への一回想

市川信愛

ベルリンの壁の崩壊と天安門事件という対照的な胎動を画期に、20世紀は最後の10年目に入ったが、激動する歴史の歯車は、好むと好まざると拘らず、華僑・華人社会の変容を加速することになる。このような変化を、華僑・華人研究者はどのように受けとめようとしているのだろうか。ともすれば、個別科学の領域内にとじこもって、静態的、文献的な方法論で試行錯誤の牛歩をくりかえしてきた筆者にとっては、正に衝撃的な反省の機会であった。急展開する問題状況のさなかに、游仲勲教授の近著『華僑』（講談社現代新書、1990年1月）は、小冊子ながら今日的視座に立った、全地球的、普遍的華僑・華人動態論ともいえるもので、ユニークかつタイムリーな問題提起の好著である。私自身、10年に近い華僑・華人研究をふりかえる契機としたいと思っていた折しも、本誌に一文をこわれることになった。平素の悩みの一端を開陳し、大方の叱正をいただく契機ともなれば、望外の幸せと思う。

反省の第1は、上述したとおり静態的研究と動態的分析とをいかに補完、調和させるかに力不足を痛感しているところだが、次に、膨大な研究素材の宝の山に、悪戦苦闘している現状を告白したい。

1980年、明治中葉から大正、昭和にかけて、長崎を拠点に大陸、台湾、東南アジア各地と交易していた華僑商店「泰益號」（陳氏、金門出身）が、半世紀に及ぶ膨大な記録、文書、書簡類（4万点をこえる）を、ほとんど完全な形で保存、長崎市立博物館に一括寄贈を申し出られた。当時の館長杉村邦夫氏は英断で引き受けられ、たまたま長崎大学に在勤していた筆者が協力することとなった。当初は文字通り徒手空拳でスタートしたのだが、文部省科研費補助や地元銀行からの助成に支えられて、前近代的手作業ながら整理を進め、目録の作成と主要帳簿のマイクロフィルム化、書簡類のコピー化が一応終り、広く利用者へ公開できるまでになった。成果の一部（目録、解説、復刻等）は、長崎華僑研究会（代表宮田安氏）の『年報』として5輯まで出している。

整理が進むにつれて、一見雑然とした膨大な書類の山が一定の法則によって作成された帳簿体系からなっており、更に取引の往復書簡類は、その折々の商売の機微を如実に物語り、全体が一個の有機体を構成していることが明らかとなつた。これは正に希有ともいえる貴重な華僑商人活動研究の素材である。加えて、同店主は、長崎華僑社会のドンであったことから、僑団、唐寺、僑校等に関する少なからぬ記録も残っている。更に当時を語る古老や老舗も少いながら残存しており、効率は必ずしも高くはないもののインタビュー調査によってえられた証言や、思いがけない資料の発掘の喜びに出会うこともある。帳簿体系の研究は、商業経営史の分野から斯波義信教授（東大東文研）指導の下に、許紫芬さん（大阪大院卒）の詳細、精緻な研究成果をえている。また僑団（主に福建幫）関係の記録類の解説と分析は、西日本史学会宮崎支部（支部長山内正博宮大教

授) でとりあげられ、黒木国泰氏(宮崎女子短大)を中心に地道な作業が進んでいる。だが、もっともおくれているのは、同文書の経営の内部にメスを入れ、併行して実地に追跡調査を行うという、デスクワークとフィールドサーベイ、双方を調和させる研究のパフォーマンスが中々軌道に乗らないことである。

幸い、この研究調査への一つの活路として、国際間の共同研究システム構築への道が、文部省海外学術研究費補助採択という形で拓かれることとなった。1988~89年度の日台間の共同研究という始動的ステップをへて、1990年度以降に、日、台、香、大陸(福建)間の共同チーム(10人)による受け皿づくりが可能となった。本プロジェクトの課題は「20世紀前期台湾海峡両岸交易に関する総合的研究」を掲げている。当面、このチームをいかに効率よく、コーディネートするかが成否のかぎであることから、各研究者がまず一堂に会し、本音で討論し合う機会の設定が急務と思い、その準備を始めたところである。だがここに、意外な伏兵=障害が潜んでいることに気づくことになった。

それは、わが国政府(ここでは文部省)による学術研究助成システムに内在する、国際感覚の欠如ないし海外の学術研究助成システムの実体に対する認識不足である。即ち、欧米における研究プロジェクトへの助成は、人件費(調査補助員)を含むことが常識となっているが、これは調査研究旅費主体の日本方式になじまない。生活水準、物価、と人件費がほとんどわが国と比肩するNIEsにあっては、喜んで共同研究を引き受けいただいた方々に、かえって失望を与えることにもなった。学術調査の場合は、若干の弾力的運営が可能であっても、共同研究、大学間協力研究では、ほとんどその余裕はない。対等の立場で共同で行うという立て前であっても、金満国とみられている日本政府の助成が、かくも貧弱なものかということの説明には、正直のところ困り果てたというのが実情である。

ともあれこのような局面に苦慮している矢先、中村質教授(九州大学)の音頭で、昨年末「九州華僑・華人研究会」(会長川勝守九大教授)が発足することとなり、有形・無形の支援態勢ができたことを感謝している。そして、その一部会として、会場を九州国際大学(八幡キャンパス)にもつ「泰益號書簡解読会」という地道な勉強会が、地元の華僑・華人の方がたの参加もあって、月2回のリズムで軌道にのるようになった。

これは正に、<sup>ナカタ</sup>地方文書による華僑庶民史研究の領域に属するものであり、主としてエリートの手になる文献を主体とする歴史学へのアンティ・テーゼともいえるであろう。いわば、サイレントヒストリーないし大衆史としての視点からの華僑・華人論の構築への一試行ともなるであろう。牛歩の10年を回想すれば、広義の社会経済史からスタートして、経営学、政治学、社会人類学などの手法と学際的知識に支援されながら、九州という地域の中で、研究の枠組みとシステムづくりを模索しつづけたということができるかも知れない。

そして、反論をかえりみず再言するならば、現在急展開する時代背景と状況認識に立ち、グローバルな空間設定のもとでの華僑・華人普遍史ないし総論のほり起しあは急務であり、それは本来社会移動者としての彼等をその深層構造から問い合わせ直す華僑社会人類学(仮称)ともいえる社会科学の新しい胎動を促しているのではないだろうか。そのため

の分析装置としての柔軟な学際研究体制と、幅広い国際間学術交流のシステムづくりが前提となると考えるが、かかる学際・国際両側面協調への仲介者の役割を、東南アジア史学会に求めるのは、過大な期待といわれるであろうか。

## 東南アジア研究とパソコン

赤木 攻

私は、小さいころから、文房具が好きであった。とりわけ、筆記具が好きであった。複式教育を受けるほどの寒村の山小屋小学校だったせいか、運動会や学芸会の時に配られる賞品は、鉛筆が最も多かった。その鉛筆ができるだけ大切に使用し、ためることが好きだった。中学時代には、ガリ版が好きになり、お年玉で鉄筆を買い求めた記憶がある。大学時代から、タイプライターに懲り始め、タイ研究を志し始めてからというもの、英語、日本語、タイ語のタイプライターをそれぞれいくつ買い換えたか、覚えていない。20年ほど前に、最初のタイに関する論文を書いたのも、あのグリコ犯が使用したもう一つ前の邦文タイプライターで、原稿を見た印刷所がびっくりしたほどであった。だから、ワープロに飛びついたのも結構早く、今ではワープロを前にしなければ、文章が書けなくなり、ほぼ異常な段階に達している（この原稿は「一太郎」で書いている）。

その私も、ことパソコンになると、もう付き合いは3年ぐらいになるが、いまだに理解できない。ただ、パソコンは従来の文房具とは基本的にことなり、単なる筆記具ではなく、利用次第ではきわめて能率的な仕事を可能にする無限性を秘めている、ということはわかる。ここでは、私のささやかなパソコン体験をもとに、東南アジア研究においてパソコンはいかなる役割を持つようになるのかを簡単にスケッチしてみたい。

まず、最も多くの人が近い将来恩恵を受けるようになるに違いないのは、各国語のワープロであろう。とりわけ、インド系の文字であるタイ語やクメール語のワープロは貴重である。パソコンはこれを可能にしてくれる。実際、タイ語のワープロソフトが利用できるようになってからは、タイ語タイプライターを処分してしまった。現在、様々な公的研究機関で東南アジア語のワープロソフトの開発が進行しているようであるが、私が使用しているのは、高橋俊行氏を中心とした民間ボランティアの輪が生み出した〈ASIAN WRITER〉（東南アジアの諸言語のほとんどがそろっている）のタイ語版で、まだ完全ではないが、タイ語の原稿づくりに大層お世話になっている。とりわけ、タイ語に加えて日本語と英語と国際音声文字の同時処理が可能なので、試験問題の作成などには打ってつけである。また、パソコンがワープロに比べて秀でているのは、ベトナム語版ソフトに入れ換えればベトナム語ワープロになるというように、1台で何役をもこなすという点である。

このワープロソフトを出発点として、検索、並べ替え、計算などの機能が将来充実していくと、データの蓄積と利用・処理が可能となる。パソコンの本領は特にデータ処理にあるわけだから、これまで大変な時間を費やさねばならなかった作業がきわめて容易になる。たとえば、語彙の言語学的処理、特定史料の語彙インデックスの作成、辞書の編纂、各種統計操作などである。社会学的調査の集計作業においても、より複雑なクロ

の分析装置としての柔軟な学際研究体制と、幅広い国際間学術交流のシステムづくりが前提となると考えるが、かかる学際・国際両側面協調への仲介者の役割を、東南アジア史学会に求めるのは、過大な期待といわれるであろうか。

## 東南アジア研究とパソコン

赤木 攻

私は、小さいころから、文房具が好きであった。とりわけ、筆記具が好きであった。複式教育を受けるほどの寒村の山小屋小学校だったせいか、運動会や学芸会の時に配られる賞品は、鉛筆が最も多かった。その鉛筆ができるだけ大切に使用し、ためることが好きだった。中学時代には、ガリ版が好きになり、お年玉で鉄筆を買い求めた記憶がある。大学時代から、タイプライターに懲り始め、タイ研究を志し始めてからというもの、英語、日本語、タイ語のタイプライターをそれぞれいくつ買い換えたか、覚えていない。20年ほど前に、最初のタイに関する論文を書いたのも、あのグリコ犯が使用したもう一つ前の邦文タイプライターで、原稿を見た印刷所がびっくりしたほどであった。だから、ワープロに飛びついたのも結構早く、今ではワープロを前にしなければ、文章が書けなくなり、ほぼ異常な段階に達している（この原稿は「一太郎」で書いている）。

その私も、ことパソコンになると、もう付き合いは3年ぐらいになるが、いまだに理解できない。ただ、パソコンは従来の文房具とは基本的にことなり、単なる筆記具ではなく、利用次第ではきわめて能率的な仕事を可能にする無限性を秘めている、ということはわかる。ここでは、私のささやかなパソコン体験をもとに、東南アジア研究においてパソコンはいかなる役割を持つようになるのかを簡単にスケッチしてみたい。

まず、最も多くの人が近い将来恩恵を受けるようになるに違いないのは、各国語のワープロであろう。とりわけ、インド系の文字であるタイ語やクメール語のワープロは貴重である。パソコンはこれを可能にしてくれる。実際、タイ語のワープロソフトが利用できるようになってからは、タイ語タイプライターを処分してしまった。現在、様々な公的研究機関で東南アジア語のワープロソフトの開発が進行しているようであるが、私が使用しているのは、高橋俊行氏を中心とした民間ボランティアの輪が生み出した〈ASIAN WRITER〉（東南アジアの諸言語のほとんどがそろっている）のタイ語版で、まだ完全ではないが、タイ語の原稿づくりに大層お世話になっている。とりわけ、タイ語に加えて日本語と英語と国際音声文字の同時処理が可能なので、試験問題の作成などには打ってつけである。また、パソコンがワープロに比べて秀でているのは、ベトナム語版ソフトに入れ換えればベトナム語ワープロになるというように、1台で何役をもこなすという点である。

このワープロソフトを出発点として、検索、並べ替え、計算などの機能が将来充実していくと、データの蓄積と利用・処理が可能となる。パソコンの本領は特にデータ処理にあるわけだから、これまで大変な時間を費やさねばならなかった作業がきわめて容易になる。たとえば、語彙の言語学的処理、特定史料の語彙インデックスの作成、辞書の編纂、各種統計操作などである。社会学的調査の集計作業においても、より複雑なクロ

ス集計をより簡単にし、より豊富な結果を得られる可能性が高い。従来活字がないという理由で印刷が困難であった類の文字による印刷出版も容易になり、研究成果の発表も活性化される。

最大のパソコン効果は、データベースの作成と利用かも知れない。たとえば、東南アジア関係文献を一つとり上げても、諸言語によるデータベースが作成されれば、その検索はきわめて容易になり、生産的利用を可能にするであろう。現在でも主要日刊紙などの東南アジア関係ニュースを拾おうと思えば、そうした要求に応じるオンライン・データベースがあるが、契約料などがまだ高く個人の負担としては重すぎるため一般化していない。東南アジア研究に関する様々な分野のデータベースを集中させたセンター構想などは、我が学会などが将来に向けて取り組むべき最優先課題になってくるであろう。

パソコンのもう一つの大きな特徴は、データや情報の交換・通信機能である。東南アジア史学会の会員を結ぶパソコン通信網は是非ともつくりたいものだ。東南アジア史学会ネットが完成すれば、学会の知らせ、研究会や会合のニュース、お互いの間の情報交換、ちょっとしたメール、各種データのやりとりが自由におこなえるようになり、便利になるのは間違いない。もちろん、その時にはこの『会報』も必要なくなるであろう。さらに、このネットを海外と結べば、海外在住会員との通信が可能になる。タイあたりでは、すでにパソコンが社会生活の中にかなり入ってきている。その内東南アジア各国でもパソコンは日常化するに違いない。電話使用料金が安くなるなど、使用環境が整えば、各国の研究者との通信が可能になり、情報交換が簡単になるなどの利点が生ずるであろう。

皆がパソコンに最も期待しているのは、自動翻訳かもしれない。現在のパソコンのメモリー容量で可能なのかどうか私にはよくわからないが、ある中間言語を設定し、その中間言語と各言語の翻訳システムを開発し、各言語間の翻訳はその中間言語を介して行なう方法が最も合理的といわれているようだ。いずれにせよ、ある程度の自動翻訳にはすでに成功しており、そう遠くない将来に各言語間のコンピューター自動翻訳が実現するのは間違いない。そうなれば、翻訳作業に大革命が起こるであろうし、翻訳の意味そのものが違ってくるであろう。

以上述べてきたパソコンを利用した東南アジア研究の本格化は、我々の世代というよりは、次の世代にたぶん生まれてくる新しい文明の波であろう。そして、それは100%好ましいと考えるのも間違いに違いない。とはいえ、パソコンを頑なに拒否し、あくまでもキー・ボードに触ろうとしない研究者は、機械コピーを拒否し手写しを実践するぐらいの心構えがないと立ち向かえる波でないことは確かである。

---

## 第41回研究大会発表要旨補遺

---

### パプアニューギニア中央高地における ビッグマン権力の盛衰と贈与交易圏の変移

紙村 徹

本発表では、長距離交易網の歴史的変遷とビッグマン権力の盛衰とをシステムティックに連関させる構造モデルを提示し、東南アジア史にしばしば現われる交易王朝の構造へ迫るヒントにしたいと目論んでいる。

パプアニューギニア中央高地のエンガ族は、ほぼ4年毎に各独立の共同体をリンクさせ、延々100キロにわたる贈与交易網を現出させている。交換媒体は真珠貝と豚であり、交易ネットワークの全体像は直線型であり、その回路を交換媒体の単方向的フローが継起的に反転してゆく振動スタイルをとっている。交換主体たるクラン共同体は、小規模とはいえ最大の政治的・慣習法的に独立した集団であり、何ら世襲的身分・階級をもたない平等主義を基調としている。こうした共同体では、何らかの財源を資本として交換儀礼に投資し、共同体内で質・量ともに最大規模の交換と饗宴を挙行した男こそ、ビッグマンと呼ばれるリーダーシップを獲得できるのである。

交易回路の本流に位置する共同体では、成員の大半が各々独自の交換相手を外部に持ち、それらを介して富財が大量に共同体内外に流出入する（交換強度が高い）ため、ビッグマン層の成長を促す財源確保が困難となる（階層化度が低い）。ビッグマンの権力が低下すると、共同体成員は富財を冠婚葬祭等の家内的消費・支払用に蓄積し、大規模な交換儀礼にそれら富財を導引しにくくなる（内部循環速度が低い）。この共同体内の蓄積志向は共同体間の交易回路を閉鎖し、従って当該共同体は交易回路の本流から脱落し、周縁的ポジションへ転落する（交換強度が低い）。こうした周縁の共同体では、稀少な外部との交換回路を介して自由に流通させうる富財を確保したビッグマンは、それら富財の排他的コントロールによって強大な覇権を形成し、当該共同体は一種の双分階層社会となる（階層化度が高い）。強力なビッグマンの指導下に家内的に蓄積された富財は速やかに各種の交換儀礼に投資され（内部循環速度が高い）、さらに加速化されて、ついには外部との交易回路を開放し（交換強度が高い）、再度交易回路の本流に再加入させるのである。かくして全体モデルの循環は一巡する。

各共同体の生産力に差違がない事を前提にすれば、長大な交易網の辺境に位置する共同体にこそ、強力なビッグマン階層を暫定的に輩出させるメカニズムが見出される。これを1960年代のワバグ地区のケースの歴史学的理解のモデルとして適用しようとした。

---

## 地区例会・研究会活動状況

---

### 関東地区

鈴木恒之

関東例会では、上智大学アジア文化研究所に会場のお世話をいただいて、10月、11月

---

## 第41回研究大会発表要旨補遺

---

### パプアニューギニア中央高地における ビッグマン権力の盛衰と贈与交易圏の変移

紙村 徹

本発表では、長距離交易網の歴史的変遷とビッグマン権力の盛衰とをシステムティックに連関させる構造モデルを提示し、東南アジア史にしばしば現われる交易王朝の構造へ迫るヒントにしたいと目論んでいる。

パプアニューギニア中央高地のエンガ族は、ほぼ4年毎に各独立の共同体をリンクさせ、延々100キロにわたる贈与交易網を現出させている。交換媒体は真珠貝と豚であり、交易ネットワークの全体像は直線型であり、その回路を交換媒体の単方向的フローが継起的に反転してゆく振動スタイルをとっている。交換主体たるクラン共同体は、小規模とはいえ最大の政治的・慣習法的に独立した集団であり、何ら世襲的身分・階級をもたない平等主義を基調としている。こうした共同体では、何らかの財源を資本として交換儀礼に投資し、共同体内で質・量ともに最大規模の交換と饗宴を挙行した男こそ、ビッグマンと呼ばれるリーダーシップを獲得できるのである。

交易回路の本流に位置する共同体では、成員の大半が各々独自の交換相手を外部に持ち、それらを介して富財が大量に共同体内外に流出入する（交換強度が高い）ため、ビッグマン層の成長を促す財源確保が困難となる（階層化度が低い）。ビッグマンの権力が低下すると、共同体成員は富財を冠婚葬祭等の家内的消費・支払用に蓄積し、大規模な交換儀礼にそれら富財を導引しにくくなる（内部循環速度が低い）。この共同体内の蓄積志向は共同体間の交易回路を閉鎖し、従って当該共同体は交易回路の本流から脱落し、周縁的ポジションへ転落する（交換強度が低い）。こうした周縁の共同体では、稀少な外部との交換回路を介して自由に流通させうる富財を確保したビッグマンは、それら富財の排他的コントロールによって強大な覇権を形成し、当該共同体は一種の双分階層社会となる（階層化度が高い）。強力なビッグマンの指導下に家内的に蓄積された富財は速やかに各種の交換儀礼に投資され（内部循環速度が高い）、さらに加速化されて、ついには外部との交易回路を開放し（交換強度が高い）、再度交易回路の本流に再加入させるのである。かくして全体モデルの循環は一巡する。

各共同体の生産力に差違がない事を前提にすれば、長大な交易網の辺境に位置する共同体にこそ、強力なビッグマン階層を暫定的に輩出させるメカニズムが見出される。これを1960年代のワバグ地区のケースの歴史学的理解のモデルとして適用しようとした。

---

## 地区例会・研究会活動状況

---

### 関東地区

鈴木恒之

関東例会では、上智大学アジア文化研究所に会場のお世話をいただいて、10月、11月

の月例研究会を開催したが、90年3月は会場を東京女子大学に移した。

なお、11月の研究会は東南アジア考古学会との共催で行った。

1989年10月28日 川島 緑「フィリピンにおけるプローカー依存型国民統合体制の成立——1950年代ムスリム・エリートの役割を中心に」

11月25日 量博満・今村啓爾「ベトナム考古学近況」

1990年3月31日 伊東利勝「タトン地域の古代文化について——ミャンマーにおけるピュー遺跡発掘調査の現状——」

## 中部地区

楢木瑞生

南山大学を会場に隔月に開いてきた研究会も、本年3月で第56回となりました。

参加者はかならずしも東南アジア史学会の会員だけというわけではなく、いろいろな分野から、いろいろな職種の方の参加が見られました。また、最近では若い研究者の参加が目立つようになりました。東南アジア研究の魅力をうまく伝えられればと考えています。

最近三回の研究会の話題は次のとおりです。

1989年11月18日 生田 滋「ポルトガル・オランダ資料よりみたアユタヤ王国史」  
(参加者18名)

1990年1月27日 Grant K. Goodman (Univ. of Kansas)

「ATHLETICS AS POLITICS——Japan and Philippines in the 1930s——」(参加者13名)

3月17日 前田俊子「インドネシアの母系社会とその変容」(参加者16名)

## 関西地区

倉沢愛子

1989年11月から1990年4月までに、例会は下記のように6回開催し、7名の方々から話題を提供していただいた。

1989年11月4日 大橋厚子「ジャワ西部プリアンガン地方におけるコーヒー生産とレヘントの変質——18世紀初めから19世紀初めまで」

12月23日 石井米雄「上座仏教圏の伝統法研究について」

1990年1月13日 木村滋世「東北タイの教育について——ある村の小学校の『教育管理計画』を読む——」

志賀照明「タイの中学生がみた日本——1988年のアンケート調査結果——」

2月3日 清水政明「越南漢字音に見られる避諱の現象について」

3月10日 桜井由躬雄「「王」と「国」の分裂——1885年詔勅をめぐって」

4月14日 渡部 敦「南バンテンの長老制」

3月10日の例会をもって第150回を迎えたので、この日は、例会終了後京大会館で記

念パーティーを開催した。開始当初からずっと、お骨折りいただいた京大東南アジア研究センターの石井米雄教授と桜井由躬雄助教授が、共にこの4月1日づけで東京へ移られるため、その送別の意味もこめたパーティーになった。これまで関西例会ずっと中心的役割を果たして下さったこの両名が去られることもあり、この4月から例会開催場所を、京大東南アジア研究センターから、新地区委員の勤務校である大阪府寝屋川市の摂南大学へ移した。摂南大学は京阪沿線で大阪と京都の中間に位置しており、広範囲から“観客”を動員できると期待しているが、これまであまり多くの方々になじみのない大学でもあり、今後さらに広報活動を続けてゆきたいと考えている。

### 中国・四国地区

植村泰夫

SEAF (South East Asian Forum) 於：広島大学総合科学部

1989年11月7日 河野佳春「M・ハッタの国民統合構想について」

11月28日 白石 隆「英領マラヤ日本人ゴム園進出の性格について」

12月19日 プラップルン・コンチャナ

「アユタヤ歴史資料館の建設の経緯について」

---

### **事務局からのお願い**

---

『会報』の内容充実のため、資料・研究短報欄へご寄稿下さい。

新資料に関する情報、探究資料の公開検索、内外での研究集会に関する情報や紹介（但し、本学会の組織とは直接関係なく、かつ恒常に運営されている研究会の年次報告に類するものはご遠慮下さい）、特定分野にかかる内外の新しい研動向など、二千字程度を目処にお纏め頂き、事務局宛て送付下さい。毎年3月末と9月末に締め切り、それぞれ5月及び11月発行の『会報』に掲載させて頂きます。

住所変更等につきましては、すみやかに事務局宛て一報下さい。

「転居先不明」は会誌『東南アジア—歴史と文化—』『会報』その他各種ご案内の送付に支障をきたすことになります。ご面倒ながら、転居、転勤などの通知先に、本学会事務局も加えて頂きますようお願い申し上げます。なお、今回の変更は、4月13日までに事務局へ連絡のあった分です。

次の方々の住所が不明です。亀山直光、水野 潔 ご存じの方は、事務局までお知らせ下さい。

東南アジア史学会の運営全般に関するご意見、ご要望がございましたら、事務局までご遠慮なくお寄せ下さい。

---

## 東南アジア史学会会報

1990年5月 発行

発行者 東南アジア史学会(会長 明石陽至)  
住所 〒441 愛知県豊橋市町畠町1-1  
愛知大学文学部伊東研究室内  
電話 0532-47-4111 FAX 0532-47-4132  
郵便振替 名古屋4-106244 東南アジア史学会

---